様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月 ２０ 日現在

機関番号：３５３０９
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2016
課題番号：２５７８０４１４

研究課題名（和文）告知を受けた軽度認知症患者の精神的安定に寄与する心理的要因の縦断的検討

研究課題名（英文）Longitudinal study of psychological factors contributing to the mental stability of individuals with Alzheimer's disease

研究代表者
荒井　佐和子（Arai, Sawako）

川崎医療福祉大学・医療福祉学部・講師

研究者番号：２０６１０９００

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：アルツハイマー病患者と家族13組に対して面接調査を1年間に3回実施し、患者の抑うつを低減させる心理的支援方法について検討した。その結果、抑うつ傾向の患者と抑うつ傾向でない患者では、忘れない努力の方法が異なることが明らかになった。また、抑うつ傾向が改善した患者とその介護者の関わりに特徴的な相互作用が見出された。これらの結果から、患者と介護者に対する支援方法が提案された。

研究成果の概要（英文）：This study explored methods to alleviate the suffering of individuals with Alzheimer's disease (AD). We interviewed 13 pairs of patients with AD and their family members three times in a year. As a result, it was revealed that the method used to maintain their memory is different between depressed patients and non-depressed patients. In addition, a characteristic interaction was found in the relationship between the patient whose depressed tendency was improved and the caregiver. From these results, support methods for patients and caregivers were proposed.

研究分野：社会科学

キーワード：認知症　心理　記憶障害　抑うつ　心理的支援　アルツハイマー病

１．研究開始当初の背景

認知症医療の現場では、診断技術の向上や治療薬の登場、認知症に関する啓発・知識の普及による早期受診者の増加などにより、理解力や判断力の障害が軽度の段階で認知症と診断され病名告知を受ける患者が増加している。そのような背景のもと、自分の記憶障害や今後起こりうる認知機能の低下に向き合い、抑うつを呈する軽度認知症患者が散見されるようになり、彼らへの支援の必要性に目が向けられるようになった。特に今後も認知症患者の増加が見込まれる日本において、症状に向き合い抑うつや苦悩を呈する軽度認知症患者に対して、心理学的知見に基づく支援の検討は急務と言える。

研究代表者は以前より日本において最も多い Alzheimer's Disease（以下、AD）患者とその家族を対象として AD に罹患する体験について聞き取り調査を行い、患者の抑うつや不安には、患者の病気への対処方法（病気をどのように捉え、対処するか）や家族の病気の理解等が関連していることを明らかにした（荒井、2011）。そして、この研究の追跡調査を行っている中で、記憶障害に苦悩していた患者が 1 年半後、認知機能障害の程度は不変であったにもかかわらず精神的に安定した事例を経験した。この変化に関連する要因について検討したところ、患者の病気に対する態度の変化と家族の対応の変化が関連していると考えられた（荒井他、2012）。

これらは、記憶障害が特徴的な AD という病気を持つ患者においても病気への対処方法は変化しうること、そして AD 患者本人への心理的支援方法の糸口を示した研究であると言える。ただし、荒井他（2012）では、調査間隔が 1 年半と長かったこと、および、一事例研究であったことから、変化が生じたプロセスの詳細な検討が出来ず、複数例での短い調査間隔での縦断研究が必要であると考えられた。

＜引用文献＞

荒井佐和子（2011）. アルツハイマー病患者の記憶障害の自覚と気分に関する心理学的研究　広島大学大学院教育学研究科学位論文

荒井佐和子・片山禎夫・兒玉憲一（2012）.「忘れる苦しみ」から抜け出した アルツハイマー病患者の事例―テキストマイニングによる語りの変化の分析―　日本認知症ケア学会誌、11 (1)、245.

２．研究の目的

本研究では、軽度 AD と病名告知を受けた患者の精神的安定を維持、改善するために重要な要因について明らかにすることを目的とした。具体的には以下の 3 点の問いを明らかにすることを目的とした。

(1) 抑うつ傾向の患者と抑うつ傾向が認められない患者の語りの間には、どのような違いがあるか（研究 1）。

(2) 抑うつ傾向の患者の中で、その後抑うつ傾向が改善した患者は、その前後でどのような変化があるか（研究 2）。

(3) 抑うつ傾向の患者と家族の心理プロセス、および抑うつ傾向が認められない患者と家族の心理プロセスはどのような特徴があるか（研究 3）。

３．研究の方法

認知症専門外来にて MCI due to AD または軽度 AD と診断された患者と付添家族に対し、面接調査および質問紙調査を実施した。面接内容は許可を得て IC レコーダーに録音した。

４．研究成果

(1) 研究 1

患者 3 名に対してパイロット調査を実施し、面接調査ガイドを作成した。

その後、13 名（男性 6 名、女性 7 名、平均年齢 77.7 歳、認知機能検査（MMSE）得点平均 22.4 点、病名告知から調査日までの平均日数 202.2 日）に対して個別の面接調査及び質問紙調査を行った。面接調査では、①記憶障害に対する認識、②記憶障害への対処方法、③家族との関係、④家庭内役割、⑤地域における役割に関する内容の半構造化面接を実施した。質問紙調査では GDS-15 にて抑うつ気分を測定した。面接で得られた発話データについて、面接調査項目ごとに回答を分類するとともにテキストマイニングの手法を用いて分析した。

その結果、以下の 3 点が見出された。

まず、記憶障害の対する認識については、患者 13 名全員が記憶障害を否定することはなく、自分の変化を感じ取っていた、ただしその変化の意味づけは、加齢によるもの、病気によるものなど多様であった。

次に、記憶障害への具体的な対処方法をテキストマイニングの手法を用いて分析したところ、頻出語上位 3 位は「思う」「忘れる」「書く」であった。このことから、全体として記憶障害に対して書くことで対処している様子が伺われた.

さらに、抑うつの評価尺度である GDS-15 の cut-off 値を基準として群分けし、抑うつ傾向群（4 名）、抑うつ無し群（9 名）を設定した。抑うつ傾向群と抑うつ無し群では性別、年齢、主たる介護者の続柄、認知機能得点（MMSE）に違いは認められなかった。両者の記憶障害への具体的な対処方法に関する発話データを対応分析にて比較した結果、抑うつ傾向群では「メモ」が特徴的であり、抑うつ無し群では「黒板」が特徴的であった.

記憶障害の対処方法としてメモ帳やノートなど外的な記録媒体を利用して記憶を補助することは、記憶障害のリハビリテーションの中で多く用いられる方法である。AD 患者においても記憶障害を認識すると書くことで対処しようと試みることが分かった。た

だし、抑うつ気分の有無によって使用する記録媒体に特徴が認められ、抑うつ傾向群はメモを、抑うつ無し群は黒板を使用していた。メモは、持ち運びには便利だが紛失しやすいこと、患者自身が持っているため周囲は内容を確認しにくいこと、記憶障害のため用事が済んで不要になった情報を判断することが難しいという特徴があり、対処行動（書くこと）が失敗につながりやすいと考えられた。一方、黒板は、持ち運びは出来ないがいつも同じ場所にあるため情報を見つけやすいこと、見やすい場所に設置されるため患者と家族が情報を共有することが前提となること、不要になった情報を家族が消しやすいといった特徴があり、対処行動（書くこと）が成功につながりやすいと考えられた。

以上の結果から、軽度の AD 患者への精神的安定を目指した支援としては記憶障害に対して単に書くことを勧めるだけでなく、その患者の生活状況を踏まえ書くことが成功体験になるような具体的方法を提案することが重要だと考えられた。

⑵ 研究 2

研究 1 で協力の得られた 13 名の患者とその付き添い家族に対して追跡調査を行った。調査内容は研究 1 と同様であり、初回調査から半年後に第 2 回調査を、1 年後に第 3 回調査を実施した。

その結果、初回調査で抑うつ傾向が認められた患者 4 名のち、半年後の第 2 回調査で抑うつ傾向が改善した者は 1 名のみであった。そこで、第 2 回調査から第 3 回調査の間に抑うつ傾向が改善された 2 名を含め、3 名（男性 1 名、女性 2 名）を抑うつ改善群として分析対象とした。抑うつが改善する前の語りと抑うつが改善したときの語りの変化をテキストマイニングの手法を用いて分析した。

その結果、3 名中 2 名で明確な記憶障害への対処方法の変化が認められた。1 名は抑うつ傾向時はカレンダーを見るという対処のみであったが、抑うつ減少時はノートを持つ、配偶者に頼るといった行動面の対処のバリエーションが増えていた。別の 1 名は抑うつ傾向時はメモを取るという行動面の対処のみであったのが、抑うつ減少時はくよくよしても仕方がないと認知面の対処も認められた。

さらに、患者に変化が生じた背景を探索するために家族への面接調査の内容を検討した。その結果、地域の活動への参加、デイサービスへの参加、家族との外出の機会の増加が認められ、どのケースも患者が楽しめる活動が家族の下支えのもと、開始されていた。

これらの結果から、抑うつ傾向が改善した患者の中には、その前後で記憶障害への対処を変化させ適応を試みる者がいることが分かった。そして、家族の下支えのもと患者全員が日常生活の変化が生じていることが明らかになった。このことは、患者の抑うつ傾向の改善を目的とした心理的支援における家族へのアプローチの重要性を示唆していると言える。

⑶ 研究 3

目的③を明らかにするため、患者と家族（13 組 27 名。患者は男性 6 名、女性 7 名。家族の続柄は夫 4 名、妻 6 名、娘 3 名、嫁 1 名）に半年ごとに 3 回の縦断調査を行った。調査内容は研究 1 と同様であり、初回調査時の GDS-15 の値により患者を抑うつ傾向群（4 名）、抑うつ無し群（9 名）に分けた。得られた語りは、時間軸を含めて多様な径路を分析する TEM（Trajectory Equifinality Model）を用いた。

その結果、患者は「本人が物忘れに気づく」を始点として「自分なりの物忘れへの理由づけ」を経た後、抑うつ無し群は自分は大丈夫だという「自己への態度」を経由し「穏やかに生活する」に至る経路が見出された。抑うつ傾向群では自己への苛立ち・情けなさという「自己への態度」を経由した後、「外部との接触を回避する」、「外部との接触を試みる」を経て、「穏やかに生活する」あるいは「穏やかに生活していない」に至る経路が見出された。

この患者のプロセスの中の「自己への態度」において患者が自分への苛立ち・情けなさなど抑うつ的な様相を呈すると、それを受けて家族は「本人への支援強度の検討」において病気の進行を遅らせる新しい外の活動（デイサービスなど）の必要性の認識に至った。さらに、部屋に引きこもり「外部との接触を回避する」患者の状態を受けて、それまで患者の意思に任せて活動開始を待っていた家族も「本人に必要だと思われる活動を家族主導で実施する」段階に進んでいった。家族がこの段階に至ると、患者も「外部との接触を回避する」段階から次の「外部との接触を試みる」へ進み、それを受けて家族は「本人に合う活動にピントを合わせる」という段階に進んでいくという相互作用が見出された。

これらの結果から、自己の能力低下に直面し抑うつ気分を呈する患者の様子を家族が受け止めることで患者と家族のプロセスが進んでゆき、抑うつ気分の軽減に有効と言われる活動の実施に至ると考えられた。そのため、抑うつ傾向の患者の心理的支援においては、介護者の応答性を支えるための援助をすること、各患者にあった活動の選択及び導入を支援することが望ましいと考えられる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計　9 件）

① Sawako Arai, Katayama Sadao, Yumiko Kutoku, Yoshihide Sunada,

Coping with memory loss: perspective from people with Alzheimer's disease and their spouses, 31st International Congress of Psychology, 2016/07/28, Pacifico Yokohama (Yokohama, Kanagawa, japan)

② 荒井佐和子、アルツハイマー病患者の抑うつ気分に家族はどう対処するか—病名告知後の認知症高齢者と家族の心理的プロセス—、日本心理臨床学会第 35 回秋季大会、2016 年 9 月 6 日、パシフィコ横浜（神奈川県・横浜市）

③ 荒井佐和子・南佳織・中川加奈子・片山禎夫、病的物忘れへの対処方法—抑うつの高低からみた対処方法の特徴、第 17 回日本認知症ケア学会大会、2016 年 6 月 4 日、神戸国際展示場（兵庫県・神戸市）

④ 荒井佐和子・沖井明・片山禎夫、病名告知後の認知症高齢者と家族の心理的プロセス－苦悩するアルツハイマー型認知症者への心理的支援に向けた探索的検討－日本心理臨床学会第 34 回大会、2015 年 09 年 20 日、神戸国際展示場（兵庫県・神戸市）

⑤ 荒井佐和子・沖井明・片山禎夫、物忘れを訴える認知症患者の心理的要因—軽度アルツハイマー病患者を対象とした探索的検討—、第 16 回認知症ケア学会大会、2015 年 5 月 23 日、ホテルさっぽろ芸文館（北海道・札幌市）

⑥ Sawako Arai, Katayama Sadao, Yumiko Kutoku, Yoshihide Sunada, Relationship between depressive mood in people with dementia, their experience, their family's recognition of dementia, 30th Annual International Conference of Alzheimer`s Disease International, 2015/4/17, Perth (Australia)

⑦ 荒井佐和子、SOM を用いたアルツハイマー病患者及び家族の心理的特徴の分類、第 16 回自己組織化マップ（SOM）研究会、2015 年 3 月 21 日、呉工業高等専門学校（広島県・呉市）

⑧ 荒井佐和子・沖井明・片山禎夫・兒玉憲一、アルツハイマー病患者の記憶障害の自覚に影響を与える要因、第 15 回認知症ケア学会大会、2014 年 6 月 1 日、東京国際フォーラム（東京都・千代田区）

⑨ 荒井佐和子・沖井明・片山禎夫、患者と家族はアルツハイマー病とどのように向き合うのか—抑うつ気分低群における検討、中四国心理学会第 69 回大会、2013 年 11 月 17 日、山口大学（山口県・山口市）

〔図書〕（計　1 件）

① 荒井佐和子・沖井明 (2015). 第 17 章 アルツハイマー病患者と家族の関係性分析　大藪又茂・徳高平蔵・大北正昭(監修)　医療・医学・薬学における SOM の応用 海文堂出版 pp. 159-167.

６．研究組織

(1) 研究代表者

荒井　佐和子（ARAI　SAWAKO）
川崎医療福祉大学・医療福祉学部・講師
研究者番号：２０６１０９００